

共に未来を育てるために

進路指導の現場から

第8回

自ら将来を選択する力を育て 希望進路実現を支援しています

**3年間を通して
主体的に選択する力を育成**

——進路指導の方針について、
教えてください。

本校は1学年320人の生徒が在籍する総合学科の高校です。卒業後の進路は、約5割が4年制大学への進学、そのほかの生徒は短大・専門学校への進学、もしくは就職等です。卒業後の進路が多様

なので、「自ら選択を重ね、自分の生き方を見つけられる力の育成」を進路指導の方針とし、全校を挙げてキャリア教育に力を入れています。

本校のキャリア教育の特徴は、1〜3年次のカリキュラムに「キャリアプランニング」(必修科目)を組み込み、体系的に行っている点です。「キャリアプランニング」は、希望進路の実現に向け

た3つの選択(文理選択、学びの分野選択、志望校・企業選択)をサポートする内容になっています。

1年次は、自己分析や職業人インタビューのほか、文理選択に向けた調べ学習などを行います。2年次前半は、進路別の調べ学習を行ったうえで、夏休みにオープンキャンパスへの参加、あるいは職場見学を選択させています。2年次後半〜3年次前半は、課題研究に取り組み、3年次後半は、それぞれの進路実現に向けたサポート講座に参加するという流れになります。

また、総合学科なので、自分の興味や希望進路に応じて、幅広い科目を選択しやすくなっています。本校の場合、2年次は週18時間分、3年次は週20時間分の授業が自由に選択できるので、1年次から将来のキャリアを真剣に考える生徒が多いですね。

キャリアセンターを設け 一貫した指導をめざす

——高校としては珍しい、キャリアセンターを設置されていますが、これはどのような組織でしょうか。

通常、総合学科の高校は、総合



神戸市立須磨翔風高校
キャリアセンター チーフアドバイザー

内匠 謙介

たくみけんすけ ●教員歴31年。専門教科は地歴公民。同校に赴任して8年目。2017年より現職。進路指導においては「チャレンジしよう。そして、そのチャレンジを楽しもう」と生徒に伝えている。

●神戸市立須磨翔風高校 ▶2009年に開校▶少人数教育、手厚いキャリア教育が特徴▶2017年度卒業生の合格実績は公立大学3名(現役のみ)、私立大学の主な進学先は、神戸学院大、甲南女子大、近畿大、甲南大、関西大、関西学院大、神戸親和女子大など。

学科推進部と進路指導部を個別に置いていますが、本校の場合、この2つをキャリアセンターに集約しています。キャリア教育と進学・就職サポートを組織的、系統的に推進することが目的です。具体的には、「キャリアプランニング」の授業運営・実施に加え、小論文や面接の指導、出願書類の作成などの進路指導などにも携わります。教員への大学情報の提供、大学の高校訪問の対応もキャリアセンターが行います。

「よい」と考える教員がいる一方で、「生徒の可能性を考えると、もっと努力を促して、学力レベルの高い大学に挑戦させたほうがよい」と考える教員もいます。教員によって指導が違えば、生徒は困惑してしまいますから、キャリアセンターが主導して、進路指導に関する方針を一層強固にしていきたいと考えています。

——キャリアセンターが行う生徒への具体的な働きかけについて教えてください。

大学進学希望者向けには「翔風チャレンジ」という取り組みを行っています。これは、一般入試受験者向けに、キャリアセンターの教員が、受験に向けた心構えや志望校の選び方、学習のプランづくりを指導するものです。これには「生徒のモチベーション維持」という狙いもあります。本校は推薦・AO入試で進学する生徒が多く、一般入試で合格をめざすのは1学年100人程度、1クラスに10数人という割合です。早々に進路を決めるクラスメートが多い中、一般入試で受験する生徒の気持ちをいかに切らさないかが課題でし



た。翔風チャレンジは、クラスを超えた参加者が集まって受験勉強の苦労を語り合う場でもあり、仲間同士の連帯感を高め、刺激を与え合う機会にもなっています。

——最近の高校生の大学選びについて、以前と比べて変化を感じますか?

今の生徒は、学部・学科研究だけでなく、学びの内容についても本当によく調べていると思います。本校は「キャリアプランニング」で、毎週のように大学研究をさせていますが、実際に「このゼミで勉強したい」「この先生の授業を受けたい」という理由から、

まとめ

総合学科だからこそ
1年次からキャリアを
真剣に考えさせている
大学独自の研究、
魅力的な学びを
どんどん伝えてほしい

高校訪問 ワンポイントアドバイス

大学について語れる方に アポイントを取って来てほしい

来校された大学の方とは、卒業生の状況等も含めて、じっくりと話したいと考えています。だからこそ、大学全体の状況をよく知っている方に来ていただきたいですね。また、アポイントはきちんと取ってもらいたいです。われわれも授業を受け持っていますし、生徒からの相談もありますから、アポイントなしでは、お話を聞く時間が限られる場合も出てきてしまいます。

志望校の選び方、学習のプランづくりを指導するものです。これには「生徒のモチベーション維持」という狙いもあります。本校は推薦・AO入試で進学する生徒が多く、一般入試で合格をめざすのは1学年100人程度、1クラスに10数人という割合です。早々に進路を決めるクラスメートが多い中、一般入試で受験する生徒の気持ちをいかに切らさないかが課題でし

た。翔風チャレンジは、クラスを超えた参加者が集まって受験勉強の苦労を語り合う場でもあり、仲間同士の連帯感を高め、刺激を与え合う機会にもなっています。

志望大学を決める生徒もたくさんいます。ただ、現実問題として、第一志望に進学できないこともあるでしょう。だからといって、中途退学してしまうのは非常に残念なことです。どのような環境でも適応し、そこで努力できる能力を高校段階で身に付けさせるのは、やはり重要だと思います。

——大学関係者に向けたメッセージをお願いします。

大学は、中学や高校と異なり、学問本来の魅力を教えてくれる場所だと考えています。就職率や取得できる資格に魅力を感じて、進学先を選ぶ高校生もいますが、そこだけをクローズアップせず、まずは大学独自の研究、学びの楽しさを、生徒たちに伝えてほしいですね。



いりさわ・たかし ● 2017年4月に第19代学長に就任。1955年広島県生まれ。1986年龍谷大学文学研究科博士課程仏教学専攻単位取得退学。龍谷大学文学部講師、同助教、同大学経営学部教授、同大学文学部教授、2013年龍谷ミュージアム館長、2015年同大学文学部長。専門は仏教文化学で、仏教遺跡調査や壁画復元事業に従事。



荒波に挑むトップ 私の改革論

No.21

龍谷大学・学長
入澤 崇

取材・文／仲谷宏 撮影／岸隆子

問「へと、学びに対する意識を変えていく——つまり、主体的な学びによって、自分で新しい世界の扉を開いていく学問の醍醐味に目覚めさせることが必要なのです。このことは、大学での4年間はもちろん、その後の長い人生において、学び続ける姿勢を維持することにもつながっていきます。」

助け合いの精神が相互理解を促す

初年次教育では、学び続ける姿勢と同時に、助け合いの精神を育成することも不可欠です。世の中には、一人でできる仕事はありません。そのため、自己中心的な考えから脱して、他人と協力して物事を成し遂げていく人間へと成長させることが必要です。こうした助け合いの精神は、異なる能力や考え方、身体的特性、言語、文化、ジェンダーを持つ人に対する理解と共感につながります。

中でも、外国語が介在するため特別なことのように思われがちなグローバル化への対応の根底にあるのは、他者への理解と共感です。その意味では、大学のグローバル化においても、助け合いの精神は重要な鍵を握っていると言えるでしょう。

大学を「通過点」ではなく 「学び続ける姿勢」獲得の「場」へ

「仏教精神にのっとり、「利他の精神」で人間教育を追究する

人生の土台をつくる 大学教育の重要性

高等教育に求められているのは、その国の未来を担う人間の育成です。しかし、日本では従来大学は、社会に出るための「通過点」という認識でした。高校生にとっては、大学に入学することがゴール

ルになっており、入学後の学生の意識は、効率的に単位を取り、資格を取得し、無事に大学生活を終えて社会に出ることに向かっているのが現状です。

このような「通過点」としてではなく、人間育成の「場」としての役割を果たすには、学生にとって大学がその後の人生の土台をつ

くる場所になっていなければなりません。この土台とは、「生涯にわたって学び続ける姿勢」のことです。学生にこの姿勢を身に付けさせるこそが、大学教育の最も大切な役割だと言えます。

土台づくりで重要となるのが、初年次教育です。入学直後に、高校までの「勉強」から大学での「学

助け合いの精神は、大学の教育プログラムを通して十分に育成可能です。基本的な考え方を伝え、実践の場を用意すれば、学生は自らの力で学びとついでいきます。

本学が「浄土真宗の精神」を建学の精神にしているように、日本の私立大学には、それぞれに建学の精神があります。その精神に立ち戻って、各大学がオリジナリティに富んだ人間教育のプログラムを提供していけば、日本の私立大学はもっと活性化していくこと

仏教思想を基に 学びの世界を広げる

このような学びへの姿勢や助け合いの精神を育むため本学では、初年次教育の充実を力注いでいます。そのための取り組みの一つが、1年次に全学部で必修科目としている「仏教の思想」です。ここではまず、自分自身を省みて、心のありようを問うことを学びます。その中で学生は、自分の日々の判断が心の持ち方で変わることに、好き嫌いや自分勝手な思い込みで判断していることなどに気づきます。

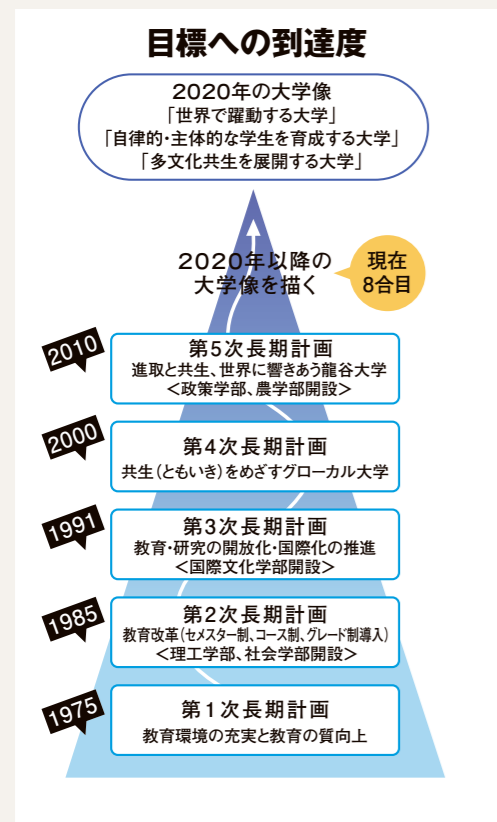
こうした気づきは学問をするときにも生きるものです。関心を

持っていることだけに耳を傾けていては自分の世界を狭めてしまいます。心を開いて、さまざまな科目を学び、広く他人の話を聞き、新しいものを受け入れることで、新たな世界への扉は開かれます。

また、仏教には「利他」の教えがあります。これは、「自分以外の者が関わり、支えてくれてこそ今の自分」に気づくことでもあります。本学には、障がいのある学生の勉学をサポートする学生グループをはじめとして、他者のために活動する学生が少なからず存在しています。排他的な風潮が強まってきている世界情勢を考えると、利他的な人間の育成は、一層その重要性を増していると言えるでしょう。

主体的な学びを促す ラーニングコモンズ

プログラムだけでなく、学ぶ場づくりも重要です。本学では、深草、瀬田の両キャンパスに、龍谷大学ラーニングコモンズを設置し、主体的な学びを促しています。コモンズは、機能別に、学生のコラボレーションスペースや成果発表の場である「スチューデントコモンズ」、国際交流や語学力を高める学習スペース「グローバル



主体的な学びを活性化させるには、教員も従来の教授法から脱する必要があるとあります。各学部では定期的にFDを開催し、学生の主体的な学びを促す教授法について取り組みの共有を行うなど、指導の改善に努めています。

学生同士、学生と教職員が互いに影響し合い、高め合いながら、その波動が社会へと広がっていく「波動を起こす大学」の実現——それが大学改革を通じて私がめざすものです。2020年の姿を描いた第5次長期計画は完成に向かいつつあるので、その先の大学像を描くことが私の務めです。そのためにも、傾聴と対話を重んじ、学生も教職員もこの大学でよかつたと思えるような大学づくりを進めていきます。